

さようなら うみねこ

白井三香子 作 さいとう たいこ 画



913

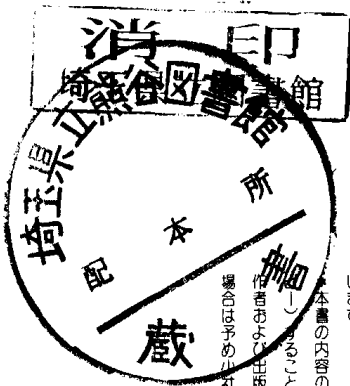
さようなら うみねこ

白井三香子 作 さいとうたいこ 画

東京 小学館 昭和 57 (1982)

142P 22cm

(小学館の創作児童文学シリーズ29)



本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピ）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め当社にて許諾を求めてください。

＊製本にはじゅつぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえします。

印刷所・図書印刷株式会社

振替・東京八二〇〇

電話・東京〇三(三三〇)五五四一(編集)
五三三三(製作) 五七三九(販売)

発行所・株式会社 小学館(〒一〇二)

東京都千代田区一ツ橋一ツ三ノ一

発行者・相賀 徹夫

画家・さいとうたいこ

著者・白井三香子

さようなら、うみねこ 定価・七八〇円
一九八二年二月十日 初版第一刷発行

さようなら うみねこ

白井三香子作

さいとうたいこ 画





装幀デザイン
中野博之

も く じ

1	うみねこだ！	6
2	^{むろらん} 室蘭からの電話 ^{でん わ}	10
3	^{ねん せい} 五年生になって	24
4	^{ほう か ご} 放課後の教室 ^{きょうしつ} で	40
5	うみねこ裁判 ^{さい ばん}	51
6	^{みず もり} 水森の接近 ^{せつ きん}	60
7	マリアホームへ	72
8	ぼくの決心 ^{けつ しん}	85
9	^{おか べ} 岡部の退部 ^{たい ぶ}	95
10	ビッグ・ニュース	109
11	「とうちゃん！」と、 うみねこはさけんだ	123
12	さようなら、うみねこ	139



白井三香子（しらい みかこ）

一九五一年、東京に生まれる。中央大学文学部卒。現在、文教大学人間科学部助手。日本童話会に属して童話を勉強。昭和52年度には同会ベスト三賞を受ける。主な作品に「はれぎをきた12ひきのちびねずみ」「たぬきのあんだセーター」など。

現住所／東京都足立区六月二―三三―一二

古庄、ハイッ102号 宮島方

さいとうたいこ

一九四九年、愛知県に生まれる。長く日本童話会の同人誌「童話」の表紙を描きつづける。作品としては「天をかついでどこいさ」「おんどりとかけたうんどろ会」「みかんみかん」「バスの小さなおきやくさん」など多数。

現住所／川崎市高津区二子三一八

さようなら
うみねこ



うみねこだ！



「起立！」

五月の連休あけの、月曜日のことだった。その朝、号令をかけたぼくは、つぎの『礼』ということばをのみこんだ。

担任の今西恵子先生のうしろから、へんな女の子が、教室に入ってきたのだ。

ぼくら——五年二組の三十七人の生徒は、その見知らぬ女の子の姿を、あっけにとられて見つめていた。

「小林！」

となりの席の林秀雄が、ひじでぼくのわき腹をつついた。ぼくはあわてて、大きな声でつぎの号令をかけた。

「れ、礼。着席。」

ガタガタといすを動かす音にまじって、教室じゆうに、クスクス笑いや、ささやき声がわきおこった。みんな、今西先生の横にならんでつつ立っている女の子の様子を見て、笑っているのだ。

こんな、みつともない女の子は、見たこともなかった。学校へ来るとちゆう、どこかのどぶにでもはまったのか、それともぬかるみでころんだんだろうか——スカートがどろだらけによごれている。そのスカートの下から、ごぼうみたいな、ガリガリでまっ黒く日焼けした、きたない足が、によつきり出ている。黒いのは足だけじゃない。顔も腕もまっ黒だ。そのうえ、どこもかしこも、古いひっかき傷やら、かさぶただらけで、もうなんともいいようのないきたなさなのだ。

おまけに、顔じゆう、ごませんべいみたいなそばかすだらけだ。鼻はにくらしそうに、つんと上を向いている。口はおこったみたいな形にゆがんでいる。なによりいちばんひどいのは、かみの毛だ。つやのない赤っ毛で、それも、のら犬の毛みたいに、バサバサにからみあって、顔の半分をおおっている。

そのかみの毛のすきまから、つりあがったちっこい目が、ギラギラ光って、ぼくらをにらみ

つけているのだった。

まったくひどい姿だった。

しかしぼくのおどろきは、今西先生のつぎのひとことで、恐怖に変わってしまった。

「えー、今度、このクラスで、みなさんといっしょに勉強することになった、海野ミネ子さんです。」

みんなのクスクス笑いは、あいかわらずやまなかったが、ぼくは笑うどころではなくなってしまった。

（海野ミネ子だって？ あいつが？ まさか……！）

ぼくは頭のとっぺんを、ガンと一発なぐられたようなショックを感じていた。

今西先生が、黒板に『海野ミネ子』と書いて、ふりがなをふった。するとだれかが、

「うんの、みねこ……うみ、ねこ！」

と、大きな声でいった。

それを聞いて、クラスのみんながどっと笑った。そして、みんな口々にはやしはじめた。

「うみねこ！」

「うみねこだ！」

つぎのしゅんかん、今西先生がおこるよりも早く、その女の子が一步前へとびだした。そして、ぼくらをすごい目でにらみつけたかと思うと、

「くそつたれ！」

と、さけんだのだ。

これには、教室じゅうが大さわぎになった。今西先生もびっくりして、おこるのも忘れてしまったみたいだった。

ぼくは頭をかかえこんだ。みんなのおどろきも、ぼくのショックにくらべたら、何十分の一……いや、何百分の一にすぎなかっただろう。

それというのも、海野ミネ子という名前は、ぼくにとっては、特別な意味を持っていたからだった。

ぼくがはじめて『海野ミネ子』という名前を耳にしたのは、いまから二か月くらい前のことだった。

② 室蘭からの電話

二か月前、ぼくはまだ四年生だった。

ぼくたちの小学校は、神奈川県かながわけんのA市内しなにある。大きな会社かいしゃの工場こうじょうがたくさんある町だ。東京とうきょうの都心としんまで、急行電車きゅうこうでんしゃで一時間じかんくらいなので、このごろは、都心に勤める人たちのベッドタウンベッドタウンとしても、開発かいぱつがすすんでいる。

ぼくたちの小学校では、クラブ活動かっとうに力ちからを入れていた。とくに、三年生から五年生までの学年ねんの生徒せいとは、よほどの事情じじょうがないかぎり、なにかのクラブに入はいって、放課後活動ほうかごをすることが、義務ぎむづけられていた。

六年生になると、生徒のなかには、私立中学しりつちゅうがくを受験じゅけんするために、特別な勉強とくべつべんきょうをしなければならぬものも出てくるので、クラブ参加さんかは自由じゆうになる。



ぼくは、読書や作文が好きなので、文芸クラブに入っていた。文芸クラブは、部員数が十人ぐらいの、小さなクラブだ。

二月の末ごろのことだった。文芸クラブの活動が長びいて、下校するのがすっかりおそくなつてしまった日があった。

「小林君、いっしょに帰ろう!」

水森礼子が、ぼくに声をかけてきた。そんなことは、はじめてだった。

水森は、かわいくて、勉強もできる。いつも明るくて、おしゃれで、ぼくらの学年ではいちばん目立つ女の子だ。だから、当然かもしれないが、ちょっと女王気どりのところがある。

三年生になって、はじめて文芸クラブに顔を出したとき、ぼくは、水森も同じ文芸クラブを選んだと知って、天にも昇る気持ちになった。

「小林君、来年度はきつと、部長さんね。」

帰り道、水森はそういって、キラキラ光る大きな目でぼくを見た。文芸クラブの役員交代が、来月にせまっていた。ぼくは、水森の目がまぶしくて、わざとぶっきらぼうにいい返した。

「まさか。岡部がいるじゃない。あいつのほうが、部長に合ってるよ。」

岡部は、水森のボーイフレンドで（と、ぼくはそのときまでそう思っていた）、文芸クラブの四年生六人のなかでは、いちばん行動力のあるやつだ。ちょっと生意気なところもあるが、いうことがしっかりしているので、みんなから頼りにされる。気の小さいぼくなど、いつも岡部には押されっぱなしだった。

「あたし、このごろさ、なんとなく、岡部君で、きらいよ。いばってるし。小林君のほうが、下級生のめんどろもよくみるし、やさしいじゃん。」

水森はそういうと、ぼくの顔をのぞきこんだ。まるで、ぼくの反応を確かめるみたいなそぶりだった。

ぼくは、正直なところ、岡部の強引さには前から少し反感を持っていた。だから、水森にそんなふうにいわれると、悪い気はしなかった。

それにしても水森の態度は、ぼくには意外だった。水森は岡部が好きなんだと、ずっと思っていたから。

水森の家は、駅の近くのマンションの五階にある。近代的でりっぱなマンションだ。ぼくの家は、さらに駅の向こう側にわたって、ナイロン工場のわきの、国道沿いにある。ぼくの父さんは、そのナイロン工場で働いているのだ。

去去去



学校から水森のマンションまでの、七、八分の道のりは、あっけなく短かった。

「じゃ、またあしたね！　さようなら。」

そういうと水森は、マンションの入口の階段をかけあがった。そしてふり返ると、ぼくにひらりと手をふった。

その夜、ぼくは、二月だというのに顔を赤くほてらせて、自分の家にたどりついたのだった。

「ただいま！」

「おそかったねえ。」

母さんが、台所でポットに湯をそそぎながら、ちらっとふり返った。茶の間のおぜんには、夕飯のしたくがととのえられていた。

「父さんは？」

ぼくは、二階の部屋にカバンを投げこんで、すぐに茶の間のおぜんの前にすわった。腹がペコペコだった。

「帰ってきたんだけどねえ。ちょっと前に、洋平おじさんから電話があって、呼ばれていたよ。長くなるかもしれないから、先に食べていいって。」

洋平おじさんというのは、ぼくの父さんの兄にあたる人だ。ぼくの家近所に住んでいて、

父さんと同じ工場に勤めている。

父さんは四人兄弟なので、ぼくには洋平おじさんのほかに、あと二人、おじさんがいる。一人は、北海道の室蘭というところで、小さな雑貨店をやっている洋三おじさんだ。洋三おじさんには、子どもが四人もいる。洋平おじさんには子どもがいないし、兄弟のいないぼくなど、洋三おじさんの家がこっちにあればいいなと、いつも思う。

さて、もう一人のおじさんは、弘次という人で、父さんたち兄弟のいちばん下の弟だ。ぼくは、このおじさんには一度も会ったことがない。若いときの写真でしか顔を知らないのだ。

ぼくの生まれる何年か前に、弘次おじさんは、勤めていた会社の金を持ち出して、逃げてしまった。それからずっと、ゆくえ不明なのだ。母さんの話では、そのとき、ぼくの父さんと、洋平おじさん、洋三おじさんの三人で、弘次おじさんが持ち逃げした金をべんしょうしたということだ。

ぼくのおじさんたち、とくに、ゆくえ不明の弘次おじさんのことを説明したのには、重大な理由がある。なにしろ、この弘次おじさんこそ、あの転校生、海野ミネ子とぼくが出会うことになった、もともとの原因をつくった張本人なのだから。